https://rodosoken.com/

藤吉信博さんを偲ぶ

浜岡　政好

当労働総研の事務局次長だった藤吉さんが事故で倒れ、復帰を目指しての療養中に急逝されてもう1年以上がたった。しかし、それこそ不意に私の目の前からいなくなったので、今でも「やー久しぶり」などと言ってニコニコ笑いながら現れてきそうな気がしている。

はじめに労働総研事務局に至る藤吉さんの略歴を簡単に紹介しよう。藤吉さんは1939年12月に福岡県に生まれ、地元の八女高校を卒業後、中央大学の経済学部に入学、その後、中央大学の経済学研究科の博士課程を修了して、1969年４月から共産党中央委員会に勤務した。そして1970年７月以降は雑誌『労働運動』誌の編集部で活躍し、1977年11月には編集長に就任した。1994年からは全労連の事務局に移り、さらに2001年からは労働運動総合研究所において事務局次長として采配をふるった。

藤吉さんの活動の前半の80年代までは日本の労働運動の右翼的再編に反対し、階級的労働運動の発展のために『労働運動』誌を主舞台に論陣を組織することに注がれた。そして90年代以降には産声を上げた階級的ナショナルセンターの全労連が理論的にも組織的にも日本の労働運動において主導的役割が担えるように、全労連事務局、労働総研事務局と場所を移りながら全力を挙げてこの課題に取り組んだ。こうしたイデオロギー戦線での戦いは、マスコミやアカデミズムの動向、社会運動の動きなども視野に入れた実にデリケートなものであったが、原則を堅持しながら柔軟に対処する藤吉さん一流の気配りと粘り強さで、個性豊かな理論家の研究者や実践家が気持ちよく活躍できるように心を砕いた。

私と藤吉さんとの出会いは中央大学の学生サークルであった。歴史好き少年であった私は、1962年に大学に入ると早速歴史学研究会なるサークルの門を叩いたが、そこに藤吉先輩がいたという訳である。こうして藤吉さんとの長いつきあいが始まった。田舎出の高校生で「歴研」なるサークルが何か知らずに入部した私は、学生運動の各セクトの見本市のようなサークルの雰囲気と威勢のよい言動に幻惑されていたが、藤吉さんはそういう新入生の前にひょうひょうとして現れ、少し大人びた口調で「君は将来どう生活するつもりかね」と尋ねた。これが藤吉さんの最初の強い印象であった。

その後、大学院時代、『労働運動』誌時代、全労連時代、労働総研時代と、ともに夢を語り、藤吉さんの企ての一端を少し担うという関係が続いた。側で見ていて、藤吉さんが理論的にも人間的にも大きく変わったなと感じたのは、阪神淡路大震災後の復興活動に携わった以降である。労働組合に結集できない多くの被災者との出会いによって、藤吉さんの労働運動論はさらに進化したように思う。最後に、藤吉さんとの長い関わりのなかでのさまざまな仕事を振り返って一字で表現すれば、「楽」かな、と思う。藤吉さん、ありがとう。

（はまおか　まさよし・常任理事・佛教大学教授）